

## 論文

## セクシュアリティの生活記録運動

—戦後日本における「変態性欲」と近代的夫婦生活

河原 梓水

はじめに

- 1 性の告白に対する2つの態度
  - 1-1 『奇譚クラブ』における<告白>の定着
  - 1-2 性科学系統雑誌における性の告白
- 2 <告白>と真実
  - 2-1 なぜ<告白>するのか
  - 2-2 フィクションと真実
- 3 変態性欲と近代的夫婦生活
  - 3-1 夫婦生活と「新らしい愛情」
  - 3-2 <告白>に描かれた夫婦生活
  - 3-3 愛の読みかえ
  - 3-4 近代的主体になる

おわりに

## はじめに

私達の寝室は土曜日ごとに極度に淫らな責め場になりました。私達は夫の提案で、主として私の体をこわさないために、特別な享樂を一週一回に限定したのでした。(…)  
 憲法記念日は私達の結婚の一週<sup>マ</sup>年記念日でした。(…)  
 夫は私を犬のように四つんばいにして、ポンプでお尻からどんゝゝ空気を入れました。(…)  
 まん丸く突き出した腹に、(…)  
 出刃包丁の鋭い切先が、ぶつつと音でも立てそうに触れた時、突然恍惚の不思議な転換が起つて、全身が激しくけいれんすると同時に私は強い快感にひきこまれました。

※ (…)  
は中略、以下同様

これは、『奇譚クラブ』1952年9月号に掲載された、羽村京子「狂い咲くカンナ」の一節である(羽村 1952: 21-23)。現代においてほとんどの読者は、これを官能小説か、SM雑

誌の創作記事の一節だと推測するのではないだろうか。『奇譚クラブ』には本作のような、「告白」や「記録」と冠された一人称のエロティックな読み物作品が多数掲載され、雑誌の目玉となっていた。

告白・記録はもちろんポルノとして読まれ、楽しまれた。しかし一方で別の受け止められ方もした。それなりに多くの人々が、これらの読み物は「真実」を描いていると感動し、絶賛し、そして彼ら自身も「真実を語りたい」として、『奇譚クラブ』に類似の告白や記録を投稿したのである。『奇譚クラブ』は、当時「変態性欲」<sup>1</sup>と呼ばれた同性愛、サドマゾヒズム、フェティシズムなどを愛好する者たちの交流の場として確固たる地位を築いたが、この告白・記録への熱情はその原動力と言ってよい。

従来、1950～60年代の性風俗雑誌が分析される際、これらの小説じみた性の告白は、たんに性的ファンタジーを提供し、筆者・読者双方の欲望を満たすポルノグラフィだとして、それ以上は十分に掘り下げられてこなかった。雑誌自体は、男性・女性同性愛、異性装研究等において着目されてきたが、その多くはルポルターージュやインタビュー記事と、「当事者たちの率直な声が表現されている」（前川 2017: 18）とされる読者投稿、具体的には批評やエッセイ、読者からの便りを掲載した読者通信欄などを主たる分析対象としてきた<sup>2</sup>。（MacLelland 2004）は、女性同性愛を描いた読み物について分析しているが、あくまでもこれをポルノとして扱っている。

たしかに『奇譚クラブ』の告白・記録はポルノとして、人々の欲望を満たす機能を果たした。しかしながら、たんにポルノであるだけならば、真実性よりもエロティックな表現の巧拙やその過激さなど、消費者としての論評が通信欄を占めてもよいはずであるし、何より真実という讃辞はそぐわない。先学の位置づけでは、なぜ『奇譚クラブ』の読者が、これらの読み物を真実とみなし絶賛したのか、そしてなぜ自らも次々とポルノじみた読み物を、しかも自らを題材とする読み物を、真実の追求として書き始めたのかを理解することができない<sup>3</sup>。彼らにとって、書くことを通じた真実の追求とはいかなる営みだったのだろうか。この問いを、変態性欲の告白・記録のうち、とりわけ夫婦間におけるサディズム・マゾヒズムを描いた作品に着目し、明らかにすることが本稿の目的である。これを通じて、匿名作家によるポルノ作品を史料として活用する道をあわせて示したい。

<sup>1</sup> サディズム・マゾヒズム、フェティシズムや同性愛、視視症、スカトロロジーなど、当時の精神医学によって倒錯とされた性的欲望を指す。異常性欲とも。差別的なニュアンスを含むが史料用語でもあるため、本稿ではこれを別の言葉に置き換えることはせず、そのまま用いることとする。

<sup>2</sup> （Mackintosh 2010, 2013）は例外的に、ゲイ雑誌掲載のフィクション作品分析を行なっている。

<sup>3</sup> 告白・記録は、グラビア写真と並んで『奇譚クラブ』の主力であった（「奇クが一番興味があるのは人にも云えず人からも聞けない話がタツプリー読めるからで、その点各人各様の性歴や告白がなんといってもトップ記事です。」（小名木 1952: 175）などより）。1950年代の読者通信欄の大部分は、両者に対する感想や批評で埋め尽くされている。先学で分析されてきた読者投稿は、これらの大部分を省いた一部分のみを分析対象としていると言わざるを得ない。雑誌上に展開した言説空間や、変態性欲者のコミュニティの様相、彼らの主体化を明らかにするためには、そうではなくて、これらの読み物を適切に位置づけ、評価することが必要であると考えられる。

## 1 性の告白に対する2つの態度

### 1-1『奇譚クラブ』における<告白>の定着

本稿で分析する『奇譚クラブ』に典型的にみられる読み物を、以下<告白>と総称することとしたい。<告白>は、雑誌上において「告白」・「記録」・「手記」・「実録」・「日記」などと称され、作者自身の一人称、あるいは三人称で自身の性的欲望や過去の性体験を語る、当事者性を持った記事を指す。定義の上では題材を変態性欲に限定しないが、本稿で扱う『奇譚クラブ』の<告白>は基本的に変態性欲について語るものである。医師や性科学者などの専門家ではなく、同好の人々に向けて書かれたものであり、自身の悩みについて書かれていたとしても、診断や治療を求めているわけではない。そして数人の例外はあるが、原則として匿名で、無名の変態性欲者の立場から書かれている<sup>4</sup>。

三人称作品については、著者と同名もしくは、別名であっても明らかに著者自身だと読者にわかる人物を主役に据え、同様に作者自身の性的欲望や過去の性体験を語る作品に限って含める。これら三人称作品はしばしば一人称作と同様の真実の告白として、誌上で位置づけられているからである。例えば、吾妻新「感情教育」は小説ではあるが、誌上では本作の主人公が吾妻本人であることが自明とされ、真実を語ったものだと認識されていた。逆に、読者からの便りを掲載した読者通信欄にみえる性の告白はこれに含めない。三人称作品とは逆に、これらは誌上において真実の告白として言及されることが少ないからである。

<告白>の掲載状況と、<告白>に対する誌上の評価を確認しておく。『奇譚クラブ』の<告白>には、しばしば「これはありのままの真実の告白/記録です」という文言が付されているが、これは決まり文句であり、当時の雑誌や書籍に掲載された告白・記録にはしばしば同じ文言が付されている。これを信じるものは少なかつただろう。しかし、『奇譚クラブ』では、読者通信欄や、読者から投稿されたエッセイや評論においても、<告白>を真実だと評価する声が頻繁に見受けられる。

六月号から十二月号迄通して受ける強い印象には圧倒されます。(…)殊に人生体験の告白としての記事の持つ真実さは、私自身苦しんだ問題なので心を強く打たれます。(S. I「無題(読者の便り)」1953年1月号、140頁)

特集告白はそれぞれに皆面白く御誌ならでは企て得られない貴重な読者の真実の告白で嬉しく思いました。(M. N「無題(読者通信)」、1954年7月号、93頁)

<sup>4</sup> ただし、この時の<告白>の書き手であった匿名作家のなかには、実名では名の知られた知識人、あるいは専門ではないにしろ作家となり、その後も長くSM系雑誌で活躍する人びとが含まれる。

S. Iは、1952年6月（5・6月合併号）以降、『奇譚クラブ』に強い印象を受け圧倒されたという。そして、「人生体験の告白」記事の持つ「真実さ」に心を強く打たれたという。この時期に「告白」とされて掲載された作品には、冒頭で掲げた羽村京子「狂い咲くカンナ」などの作品が含まれる。次に、M. Nが「貴重な読者の真実の告白」とした「告白特集」とは、時期からみて1954年6月号掲載の特集記事を指しているが、この特集にも、ただちには事実とはみなせない語りが含まれる。『奇譚クラブ』読者が見出した真実とは、単に実話であること、あるいは客観的事実であることとは考えられない。

『奇譚クラブ』が一人称の告白的な読み物を掲載し始めたのは、1950年半ばごろである。まだ変態性欲を主眼にしてはいないが、1950年9月号掲載の大木悦二「女の居る怪談」、信土寒郎「都会の溜息」などがそれである。1950年12月号掲載の、愛山久「肉体悲歌」は、「愛欲小説」と銘打たれてはいるが同時に「プロ野球選手の告白」とも記され、一人称の作品となっている。1951年11月号の巻頭特集は「女ばかりの世界を暴く!!」であり、「生々しき女体の生活記録」といった煽情的な煽り文句がならぶが、内容そのものは後の『奇譚クラブ』に掲載されていてもおかしくない、一人称の語りをとっている。

1951年12月号の巻頭作品である南里文彦「男色天国繁盛記」もまた、作者が第三者の立場から、男色について「観察」したものではなく、二人の当事者の告白を記録したという体裁で、作者ではなく当事者の完全な一人称作の語りが掲載されている。鹿島若江「性的倒錯者訪問記」も同様である。このように、1951年段階では、煽情的なタイトルを付けつつも、掲載作自体は当事者自身の語りになっているという、変態性欲の<告白>を大々的に打ち出すまでの過渡期の形態がみえる。

1952年9月号では、「倒錯の告白」という巻頭特集が生まれ、一挙に8本の<告白>が掲載された。翌月号の読者通信欄ではこの特集への言及が多くある。以降、わずかに掲載されていた専門家の変態性欲解説記事も次第に姿を消し、読者通信欄には、<告白>を絶賛し、<告白>の掲載は『奇譚クラブ』独自のものであると述べる読者の声であふれるようになる。この頃には<告白>が『奇譚クラブ』の目玉であることはしっかりと定着したといえよう。

もちろん、読者投稿のすべてが真に読者からの投稿であったかは定かではなく、そもそも雑誌の通信欄には、その雑誌の独自性を強調し、絶賛する声がしばしば掲載されるものである。しかし、管見の限り、変態性欲の<告白>はたしかに『奇譚クラブ』がはじめて、しかも唯一、積極的に掲載していたもので、同時期の雑誌にはほとんど掲載されていない。以下、1950年代前半までに創刊された、変態性欲を扱う性風俗雑誌のうち、『奇譚クラブ』以外を性科学系統雑誌と仮に呼称し、『奇譚クラブ』との相違について述べる。

## 1-2 性科学系統雑誌における性の告白

『奇譚クラブ』は模倣誌が多く出現することから、少なくとも1953年後半には既にかなりの売れ行きと知名度があったと推測できる。これ以降に創刊された雑誌には、『奇譚クラブ』の影響を受け、告白・記録を掲載しようとする意図がみられる。しかしそれ以前、たとえば1950年5月創刊の『人間探究』（第一出版社、全34冊<sup>5</sup>）や、1951年3月創刊の『あまとりあ』（久保書店、全56冊<sup>6</sup>）は当時よく知られた雑誌であったが、〈告白〉と認定できるものはごくわずかしか掲載されていない<sup>7</sup>。そもそもこれらは読者投稿誌ではなく、名の知られた作家、評論家、医学者、弁護士らによる依頼原稿を掲載する雑誌であった。ほぼすべて実名記事であり、読者投稿欄も設けられていない<sup>8</sup>。変態性欲者は、誌上座談会と、性に関する相談に時おりあらわれる。相談は、性に関する悩みが告白されたもので、一見〈告白〉と類似する。しかしこれらはあくまで専門家に向けられた相談であり、内容も専門家の分析素材として引用されているに過ぎない<sup>9</sup>。目次には相談者の名前が全く掲載されないことがそれを裏付けている。もちろん、これらは当事者の声に違いなく、

<sup>5</sup> 『人間探究』の書誌情報は（酒井 2009）を参照した。

<sup>6</sup> 本誌以外に、『誌友通信』、『誌友通信附録』、『あまとりあニュース』などの付録冊子が刊行されていたが、これらは収集が不十分であるため本稿では分析対象としていない。

<sup>7</sup> 『人間探究』には毎号20～25本程度の記事が掲載されているが、筆者が確認した23冊中、〈告白〉と認定できるものは管見の限り4本である（瀬川貞彦「私のウィタ・セクスアリス」、1号、1950年5月、花房一郎「新婚2か月の記録」2号、1950年7月、三宅一朗「検屍官」3号、1950年8月、曾我廼家市蝶（小林由利）「流伝女形系図」28号、1952年8月）。参照できていない号にさらにいくつかの〈告白〉があるとしても、その数は5本に満たないと推測される。

『あまとりあ』は全56冊のうち、〈告白〉と判断できるものは管見の限り10作、計18本のみ（①山内和英「暗い平行線」1951年5月号、②川口孝「私の身体は男でなくなったか？」1952年7月号、③木下正夫「我が同性愛傾向の解明」1953年6月号、④小林志津枝「平凡な淫女」1954年2月号、⑤田沼清「臨時男娼記」1954年3月号、⑥窪川田鶴子「白昼夢」1954年4月号、⑦三枝志津子「初夜傷痕」1954年6月号、⑧K.S「暗い欲望1～8」、1954年10月号～1955年5月号、全8回、⑨K.S「幻炎」、1955年6月号・7月号、全2回、⑩黒田史朗「女の学校」1955年7月号）。1951年3月号から1954年1月号までの約4年間、〈告白〉の掲載はわずか3本だが、1954年2月号から1号に1本程度が掲載されるようになる。これは、1953年6月頃、『奇譚クラブ』編集部を辞め久保書店に移った編集者・須磨利之の影響が考えられ、『奇譚クラブ』の手法が利用されているものと解し得る。逆に言えば、『あまとりあ』は須磨が関与する以前は、〈告白〉をほとんど掲載していない。

<sup>8</sup> 『あまとりあ』は、1955年5月号より「読者通信」（154-155頁）を設置するようになり、さらには7月号より読者からの告白、体験、実話、思い出などの投稿募集を開始する。これは『あまとりあ』にとって非常に大きな方針転換であると言える。これを主導したのは須磨利之（前掲注7参照）だと見なせる。前掲注8で挙げた黒田史朗「女の学校」は、以後彼が『奇譚クラブ』や須磨編集の雑誌に寄稿する典型的スタイルである、「『精神薄弱者』を装って女性に馬鹿にされる」という行動の記録であり、短いものの、『奇譚クラブ』に掲載された〈告白〉と遜色のないものである。『あまとりあ』は須磨が関わり始めてすぐに廃刊となったが、継続していれば〈告白〉を掲載する雑誌になった可能性がある。

<sup>9</sup> 『人間探究』の性相談の詳細とその構造については、（酒井 2009）が詳細に分析している。酒井によれば、相談者の性別には偏りが見られ、男性からの相談が圧倒的に多いという。性科学系統雑誌はそもそも男性の執筆者が多く、文体も論文調の堅苦しいものが多いが、『奇譚クラブ』は女性名の作家が半数近くをしめ、口語体を中心であることも雑誌の性質の違いを示すだろう。

『奇譚クラブ』読者にも熱心に読まれていたと考えられるが、とはいえこのような告白の掲載方法は『奇譚クラブ』編集部の姿勢とは異なっている<sup>10</sup>。

しかしながら、『人間探究』・『あまとりあ』に<告白>が見られないことは、当時の性科学系統の言説において、当事者の語りが重視されていなかったことをただちに意味しない。むしろ形式だけを見れば非常に重視されていた。『人間探究』・『あまとりあ』双方で活躍し、在野の精神分析家・性研究者として名をはせた高橋鐵は、アルフレッド・キンゼイの研究、通称「キンゼイ報告」<sup>11</sup>に共鳴したとして、性の告白に強い関心を示した<sup>12</sup>。彼が創設した日本生活心理学会は、戦後の会則として、「客員と会員は、学歴・職歴・性歴・年齢・家族関係等を届け出」ることが義務付けられ、会員は全員、自分の「性歴」を告白しなければならなかったという（山本 1993: 117）。さらに高橋は、本会の機関誌『SEISHIN REPORT』（生心レポート）で、性に関する告白を大量に紹介している。高橋は学会の事務所兼自宅で「セックスカウンセリング」を行うことで性の告白を収集しており、これらの一部も『SEISHIN REPORT』に掲載されたと考えられる。カウンセリングは研究対象とすることを前提に無料であり、毎日多くの人々が訪れていたという（山本 1993; 鈴木 1993）。

しかし、高橋が収集した性の告白の記述方式は、<告白>とは大いに異なっている。この点を示すために、『SEISHIN REPORT』において、高橋が「冷たく鋭い観察と深い反省とに貫かれて」おり、「古今東西の資料を読破した中でも、最も興味津々、無限の素材として、おそらく比類稀なもの」（2号、頁数記載無し<sup>13</sup>）と絶賛し紹介した告白がどのようなものか確認したい。

A女（三六才）付添婦。数へ年一六才の時高小卒後九州南部より上阪女工となる。一八才の春、初潮と発毛みる晩熟、性知識なく猥談はよく知るも理解なく、（…）A女の肉体。身体は中肉中背少々肥り肉、乳房は小さく経産婦にしては乳首も小さく色薄く、こんもりお椀型（…）上付き、小陰唇は薄く鮮明なる肉色、陰挺は差程発達せず、手が触れて揉めば大豆大に固く勃起し明瞭に摩擦可能、刺激は一五分-二〇分でオル

<sup>10</sup> 近年の男性同性愛研究では、男性同性愛者は決して単に専門家の視線にさらわれるだけの受動的な存在ではないと、当時の性科学系雑誌に垣間見える男性同性愛者の主体性に注目が集まっている（石村上・石田 2006; 前川 2017）。しかし、男性同性愛者側の意識と、編集部の姿勢は区別されるべきであり、本稿では何を誌面に掲載しているか、そしてそれをいかに扱っているかという点で後者を問題としている。

<sup>11</sup> （キンゼイ 1950, 1954, 1954）。

<sup>12</sup> 戦前戦後における高橋鐵の活動については、（酒井 2012）、（桜庭 2013, 2014）、（McLelland 2017）を参照されたい。

<sup>13</sup> 『SEISHIN REPORT』は奥付が無く、再版もされているため正確な発行年月日は不明。創刊号は1953年8月刊行と推測される。『SEISHIN REPORT』の書誌および2号の発行年月推定は（七面堂究齋「セイシン・レポート総目次」）を参照し、引用は（高橋鐵編集/日本生活心理学会 1987）に拠った。

ガスマスに達す、(N「一八歳より接した女性より得た記録」『SEISHIN REPORT』2号、1953年10月<sup>カ</sup>、頁記載無し)

ここでは、男性告白者Nによって、性交を行なった相手の女性の成育歴、出身、初潮の年齢や陰毛のはえた時期、容姿、性器の形、自慰経験、職業などデータが詳細に述べられている。これらはあたかも医師のカルテのような記載方法である。続く内容では、A女およびN自身の日記を参照して書かれた、執拗かつ細密な性交の具体的描写がかなりの長文で展開される。

『SEISHIN REPORT』に掲載された告白・記録のすべてがここまで徹底した記述様式を取るわけではない。告白者が性行為に際して感じた驚きや悲しみ、喜びなどが『奇譚クラブ』の<告白>と類似する調子で述べられているものもある。しかし総合的にみて、『SEISHIN REPORT』の告白は<告白>よりも直接的な性行動の描写、とりわけ、乳首の隆起や粘膜の充血、オーガズムの瞬間の様子など、目に見える身体のありさまを重視し、それを客観的に記述しようとする傾向がある。このような傾向は当時「科学的」と評されたものである。このような科学的記述を資料として、高橋やそのほか専門家の分析・解説が付される。

性器そのものや、性器の挿入行為の直接的描写は、刑法175条わいせつ物頒布等の罪に抵触し、掲載した刊行物は発売禁止となる。『SEISHIN REPORT』の性描写の多くがこれに該当する。そのためこれらの告白は、彼が関与していた『あまとりあ』などの商業誌には掲載することが不可能であった。『SEISHIN REPORT』は日本生活心理学会会員にのみ頒布した非公刊の冊子であったため、わいせつ物頒布に該当しないという考えで高橋らは堂々と性器や挿入の描写を掲載した。しかし、やはりこれらも頒布にあたるとして、1956年に高橋は逮捕・起訴されている(山本 1993)。

このように、高橋らは性の告白を軽視していたわけではなく、むしろ重視していたが、その告白とは公刊誌に掲載できないような赤裸々な性交の直接描写を意味し、目に見えるものを客観的に、正確に語ることを求めるものであった。身長や体重、性器の形などのデータも歓迎され、そこにはフィクションの入る余地はない。加えて、性の告白はあくまで専門家の分析素材として価値があるため、それを診断・評価する専門家の言説と必ずセットになっていた。このような姿勢は高橋ひとりのものではなく、『人間探究』・『あまとりあ』などの公刊の性科学系と生雑誌上においても共有されている。

以上、『SEISHIN REPORT』にみられる性の告白は<告白>とは似ても似つかぬものであり、同時期の出版物に<告白>を見出すことも容易ではない。読者通信欄に見える認識は、実際の状況を反映していると思なして誤りではないだろう。

『人間探究』・『あまとりあ』、そして『SEISHIN REPORT』にみえる科学を標榜するまなざしには、変態性欲者や女性に対する強い差別性がある。とはいえ性について客観的基準を設けて分析しようとする姿勢自体は、現代の科学的態度に一応は通じるものがあるだ

ろう<sup>14</sup>。しかし『奇譚クラブ』ではかかる姿勢をとらず、直接的な性交描写に主眼をおくこともなく、小説といったほうが正確なほどの、フィクション性の強い〈告白〉に真実を見出していた。

## 2 〈告白〉と真実

### 2-1 なぜ〈告白〉するのか

『奇譚クラブ』の〈告白〉の内容についてみてゆきたい。『奇譚クラブ』は公刊誌であり、性器の描写、挿入行為の描写などはすべて削除されるか、編集部での修正を経て掲載される。しかしそもそも、サディズム・マゾヒズム・フェティシズム等を描く場合、性器や挿入描写は必ずしも重要というわけではないし、これらの直接的な性交描写を行なうことが『奇譚クラブ』の〈告白〉の主眼でなかったことは明らかである。さらに、『奇譚クラブ』の読者の中には、讃辞を送るだけでなく、実際に〈告白〉を投稿し始める者が多くいた。彼らの〈告白〉から執筆動機の部分を参照したい。

僕は此の文章に自己告白慾と虚栄が混つて無いとは云わない。然しそれだけではない。真実を知りたい。(…)矛盾を統一して調和に達する為への、自己完成への考察である。(無論、“奇ク”には僕の一部である“変態”に就いてのみ書いたわけで、将来何年か、かゝつて僕の凡ての面をみごとに統一した小説を書きたいと夢想しているが)そして又、世の中で、自分の心の矛盾に悩んでいる人、自己の異常性に絶望している人々に向つて、自己を語りたかつたからでもある。(…)然し僕にとって“奇ク”と云う発表機関が出来た事も、トルストイやヒルテイに劣らず大切な進歩への原動力だったのである。(黒井珍平「僕の記録」1953年5月号、46頁)

黒井珍平は、女性に対する緊縛の愛好者だと表明していた人物で、長く誌上で活躍した。黒井がこの記録を書くのは「真実を知りたい」からであるという。〈告白〉することは、それを読む者だけでなく、本人にとっても真実を知るための営みであるということになる。そして次に、「自己の事情性に絶望している人々に向つて、自己を語りたかつたから」と述べている。このふたつはしばしば併記され、〈告白〉の動機として述べられる。彼らは専門家にではなく、同じ変態性欲者にむけて〈告白〉を書いている。黒井はさらに、〈告白

<sup>14</sup> とはいえ、『人間探究』も『あまとりあ』も、真剣に科学的な性研究を行なおうとしていたとは到底考えられない。誌面を見れば、医学博士や大学教授という権威の下で猥談をしているに過ぎない記事が大半であり、科学を隠れ蓑にしたポルノ雑誌とみなすほうが適切である。そのため、『奇譚クラブ』が流行してのちは、〈告白〉の掲載に踏み切るという選択肢もあり得た。前掲注 8 で触れた『あまとりあ』の方針転換はそれを示している。しかし、〈告白〉は読者からの投稿を待たねば収集することができないものであり、一ター朝に模倣することはできなかったと推測される。



>を通じて真実へ到達すること、自己の矛盾を統一し、自己を完成させることがその目的であると前者の目的を説明している。ここで黒井は、将来的には自身の全ての面を統一した「小説」を書きたいと述べており、彼にとっての<告白>が小説と類似的なものであることがわかるが、それは真実性を損なわないものようである。性科学系統雑誌における<告白>に対する態度とは全く異なる姿勢がここに見て取れる。

次に、羽村京子「狂い咲くカンナ」の執筆動機を確認したい。

恐らく誰でも、このような告白を公けにすることには非常な勇気を必要とします。しかしそれにも拘らず私は敢えて書いてみようと思います。それは二つの理由からです。一つには、私自身のために、告白することによつて自分を客観化して自己の反省と安心とを得るためと、もう一つは、他の人達に、この私の経験が何かの参考になりはしないかと思うからです。（羽村 1952: 16）

羽村は、浣腸・割腹ファンタジーの愛好者として当時絶大な人気を誇った投稿者であり、本作以降常連投稿者となり長く活躍した。羽村もまた<告白>する動機として、第一に、自分を客観化して反省と安心を得ること、第二に、読者のための参考という理由を挙げている。専門家に相談・診断を仰ぐという姿勢ではない。自分を客観化するという事は、自己を見つめなおして整理することであろうが、黒井と同様に、<告白>によって自己の真実を導き出し、そこから「反省と安心とを得る」ことが目指されているといえる。

このほか、<告白>は、真実であると称賛されるに加えて、「研究」として優れているという評価が誌面に見える。「貴誌の性研究の徹底的なのに驚くと共に非常な魅力を感じます」（沼田 1952）、「一つの「傾向性」についてあらゆる角度から集中的に追求している点が御誌のよいところだと思います」（南 1952）といった評価だが、彼らが「徹底的」であり「集中的に追求している」としたその研究の具体例が<告白>であった。つまり<告白>は、性科学的なアプローチよりも徹底的で、異なる角度——おそらく当事者自身——から集中的に変態性欲について研究したものだという見方が一定数存在した。<告白>はポルノでありながら当事者による研究でもあった。

黒井にみられるように、自己の真実はフィクションによって描写することができるという発想も、誌上では珍しくない。<告白>は「記録」と称されることも多かったが、誌上では文学と評す者もいた。文学と真実のつながりは、1950年代に文学にかけられていた社会の期待を考慮すれば驚くにはあたらないが、一方で当該期は、文学とは異なる方法で真実に迫りたいとする機運が高まっていた時期でもあった。そして、煽情的な描写が多く含まれる作品、ポルノとしての消費を当て込んでいるかにみえる作品は、真実性という点において一般的には低く評価されるはずである。『奇譚クラブ』において、真実の追求や研究という営みが、ポルノ的な表現と両立し得る事態は検討が必要であろう。

## 2-2 フィクションと真実

鳥羽耕史は、1950年代を「記録の時代」と総括し、当該期においては報道への懐疑が共有され、一般に報道されない真実を知りたいという機運が醸成されたこと、私小説や自然主義文学に対する根強い嫌悪感などを背景に、今までとは異なる新しいリアリズムを確立する方法として「記録」という様式に期待がかけられていたことを指摘する（鳥羽 2010）。国民文学運動や、各地のサークルを中心とし、農村女性にまで広がった生活綴り方・記録運動など、戦後は平和への希求と近代的主体の確立をめぐる、文化運動が強い盛り上がりを見せていた。当該期の変態性欲言説の研究において、これら同時代の文化運動との関係は十分に検討されていない。

しかしながら筆者は既に、1950年代の『奇譚クラブ』誌上にサディズムの近代化論が登場し、変態性欲の近代化・脱病理化が展開したことを明らかにした（河原 2015）。『奇譚クラブ』の誌面が近代化や民主化一色だったわけではなく、とりわけマゾヒストたちは反近代化論ともいべき論を展開していたが<sup>15</sup>、とはいえ、啓蒙主義的な近代化論が誌面で支持を得、強い影響力を持ったことは疑いない。そうだとするならば、同時代の近代化論は重要な要素となってくる。

以上の想定にもとづき、本稿では、1950年代前半、日本列島中に広がり大流行した生活記録運動と〈告白〉の関係について検討する。生活記録運動は、子供と大人を対象にしたものがあり、その理論も様々であるが、ここでは後者のうち、鶴見和子と野間宏の理論に着目する。鶴見によれば、生活記録運動とは、個人個人が生活を「ありのままに記録」することを通じて自己改造をはかり、新時代にふさわしい新しい自己、言い換えれば近代的な自己になろうとする文化運動であった（鶴見 1998）。告白することと記録することには通常では大きな隔たりがあるが、変態性欲の記録の場合常に告白的な性質を不可避にはらむため、一定の共通性を見出すことが可能である。

『奇譚クラブ』の投稿者や読者は多くの階層にまたがっていたが、誌上で活躍したのは圧倒的に知識人層である。翻って生活綴り方・記録運動は、「文章の素人がエンピツを握るところから始まった」（北河 2014: 6）とされ、民衆発の草の根運動であり、知識人の優位性を揺るがす運動であった点が評価されてきたといえる。しかしその一方で、運動に関与した学者や教師の隠れた主導性を指摘する研究も増えてきた（川村 2000）。このような生活記録運動における知識人の位置取りは、『奇譚クラブ』の言説空間とはからずも共通性がある。『奇譚クラブ』ではほぼ全員が匿名を用いていたため、知識人側の主観としては、変態性欲者という負のレッテルを貼られた者同士、「民衆」とも同じ地平に

<sup>15</sup> マゾヒストの反近代化論については（河原 2019）で論じたほか、2022年8月刊行予定の「狂気、あるいはマゾヒストの愛について」（小西真理子・河原梓水編『狂気な倫理 「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定』収録）で扱う予定である。

立てるといふ幻想を抱くことができた。そして民衆側もまた、彼らを「仲間」と認識し、彼らのことばを、上から降ってきたものではなく「仲間」同士の話し合いから生まれたものとみなすことができた。『奇譚クラブ』という空間は、生活記録運動の場となったサークルによく似た構造を持っている。このように、『奇譚クラブ』における変態性欲者の活動に、生活記録運動の影響を読み込むことは、たとえ『奇譚クラブ』が変態性欲を主題とする雑誌であり、さらに知識人を主体とする雑誌であったとしても、決して荒唐無稽ではないはずである。

さて、戦後に展開した生活記録運動は、「ありのままに記録」することが重要とされ、これを客観的事実と考えれば、高橋鐵ら性科学系統雑誌の態度と共通性をもつといえるかもしれない。しかし、生活記録が本当に「ありのまま」を記録するものであったかについては議論がある。当時の日本社会の認識としても、生活記録とフィクションの関係は議論になったテーマだった。

主として作家の立場から生活記録運動に深く関与した野間宏<sup>16</sup>は、同時期、記録とフィクションの関係について論じている。野間は、自身が編集長をつとめた文芸批評誌『生活と文学』にて、「生活綴方・記録と小説・文学」と題し、生活綴方と記録、小説と文学の関係性について、フィクションと真実という視点から検討を加えている。本連載は、創刊号から1956年6月号まで計8回にわたって連載され、同年、著書『真実の探求 現代文学の方法』（理論社）に収録され刊行された。以下、本書にもとづき野間の主張を検討したい。

野間は当時、鶴見和子と交流しており、四日市市東亜紡織株式会社泊工場サークル「生活を綴る会」に参加することもあった（和田 2003）。「生活綴り方・記録と小説・文学」は、野間が生活を綴る会に関わる過程で浮上した問題について文学者の立場から論じたものである。そして、会で当時喫緊の課題として浮上していたのは、生活綴方にフィクションを入れることの是非であったと述べている。

野間によれば、綴方は原則実名で、事実をありのままに書いていく点にその方法論的枠組みがある。しかし、数年綴方を書き続けている人々の中には「もはや事実をありのままに書いていくところにとどまっていることができないという感じに動かされているよう」（野間 1956: 10）な人がおり、自分が実際に見たり、出会ったりしたことのないことも、綴方のなかに書きたいという欲求、また生活綴方を小説のほうへも広げてみたいという欲求をもつ人が当時多くあらわれていたという。生活を綴る会において「小説の問題を考えない会の人ほとんど一人もいないといってもよいほど」（野間 1956: 10）だとも述べている。当時の生活綴方・記録と小説・文学の位置が存外近かったこと、この点をめぐり議論があった様子がかがえる。

<sup>16</sup> 野間宏の生活記録運動との関わりについては（和田 2003）を参照した。

野間はこの欲求を受けて、生活綴方と小説・文学とがどのような関係をもっているのかを解き明かそうとする。野間によれば、小説におけるフィクションはそもそも、ものごとの本質をはっきりととらえ、それを表現したいときに行われる誇張・強調であり、真実の探求のために行われるものである。真実の追求という目的を同じくする綴方・記録にも、フィクションを求める要素は内在しており、両者を対立的にとらえる必要がないと野間は説く。

野間の議論を『奇譚クラブ』の黒井たちの主張に当てはめれば、黒井が「小説を書きたい」と述べた理由は理解できる。フィクションが、より真実に近づくためのひとつの技法なのだとなれば、<告白>にフィクションが含まれることはなんら問題とならない。そして、『奇譚クラブ』の<告白>について考慮されるべき特徴として、彼らが語ろうとした自らの性的欲望は、彼らを感じたり考えたりしたことであっても、現実には語られたり行われたりしたものではないものが大半であるということである。欲望を正確に捉えるには、フィクションが確実に必要であり、またそれによって事実よりもより真実にせまった内容を浮かび上がらせることができるならば、フィクションは真実の探求と矛盾しない行為と位置づけることができる。しかし、なぜ『奇譚クラブ』の投稿者は、自身の変態性欲についてフィクションを交えて描写することを通じて、真実に迫れると考えたのだろうか。彼らが迫りたかった真実とは、そもそも何を指しているのだろうか。

### 3 変態性欲と近代的夫婦生活

#### 3-1 夫婦生活と「新しい愛情」

ミシェル・フーコーによる「告白を通じた真理の産出」論——性を告白することを通じて、告白されるべき内面がつくられ、自己の真理を産出する——を踏まえれば（フーコー 1986）、変態性欲の告白が真実を産み出すことは、問うまでもなく自明のことも思われる。しかし、フーコーが着目した真理とは、高橋鐵らが推進したような、性科学や精神医学を通じて産出される真実だと一般的には解されるはずであり、告白は専門家による統治を呼びこむとされるはずである。性科学系統雑誌と際立った相違のある『奇譚クラブ』で起きていた事態は、告白を通じた真理の産出および統治とはただちに見なせない。したがって、彼らが<告白>を通じて何をなそうとしていたのかを、<告白>のなかでも、夫婦間の変態性欲を語るものに焦点を当てて検討したい。なぜなら夫婦という単位は、民主的で近代的な新しい性のあり方が打ち立てられるべき場所として、当時しばしば注目されていたからである。

戦後日本においては、パンパンの出現や、若者の婚姻外性交渉などが性のモラルの崩壊として非難されると同時に、「性解放」が叫ばれ、学問としての性科学の確立や、正し

い性知識の普及などが必要だとする議論がなされた。そのなかで夫婦は正しい健全な性生活を実践する単位として着目され、性科学系統雑誌に留まらず一般雑誌にも多く記事が掲載され、関連書籍も多数刊行されるなどして広範に論じられていた<sup>17</sup>。ただし、媒体はさまざまであっても、書き手は性科学系統雑誌に寄稿していた知識人とかなり重複する。これらの「性解放」言説では、快楽の男女平等主義など、民主的な性のあり方が提唱されたが、それらは実質的には性別役割分担を自明視した上での平等であり、「夫婦を基盤に女性を男性の管理下におき」、「男性の女性に対する統制をはかるもの」であったという指摘がある（酒井 2009, 2012）。

新時代の夫婦のあるべき姿について、主に女性と家という問題に着目して戦後啓蒙を行った鶴見和子らの主張をみてみたい。彼女が推進した生活記録運動は、生活を記録することを通じて「自己改造」を行ない、女性たちを封建的な家制度から解放し、自律的な「あたらしい女性」を生み出すことをその大きな目的としていた。鶴見和子、野間宏、平井潔によって行われた座談会の記録における鶴見の発言を確認する。

鶴見「いま職場の間に非常にいい恋愛が、目立たない形でたくさん出てきていると思うのですよ。（…）これは女も男もおなじだけれど、愛情の面でも新しい人が、人間として新しいと思うのです。愛情の問題は、人間改造の試金石だと思うのですが……。『職場からうまれたあたらしい愛情—野間宏氏、鶴見和子氏と語る—』（平井 1956: 86）

鶴見は「愛情の面でも新しい人が、人間として新しい」と述べ、「人間改造の試金石」だとまで述べている。封建的ではない、民主的・近代的な愛情を育むことは、近代的な自己を確立する上で重要だと考えていることがうかがえる。近代的な新しい夫婦の間に必要な「新しい愛情」とは、「美しい愛情」とも呼ばれ、封建制から脱却し、対等な男女間が育むものとされ、民主化の流れのもとアメリカをモデルとして推進されていた。

鶴見や、当時の多くの女性解放論者にとって、「あたらしい女性」とは、男性と対等に考え、男性と対等な恋愛関係・夫婦関係を結ぶことができる女性であった。このような対等な男女関係に重要なのが「愛情」の問題であるとされる。鶴見らの運動において「新しい愛情」確立の問題は、おおむね理念と心情の不一致の問題としてとらえられていた。例えば、組合運動に参加している男性が、しかし結婚するなら組合の活動をしていない女性がよいと発言したり、自立を目指したいと主張する女性が、しかし結婚してからは家庭に入りたいたいと思ったりといった、要するに学んだ思想と、意識下にしみついた封建的価値観の対立という構造である。したがってこの問題は、男女に依然として残る封建制を取り

<sup>17</sup> 『夫婦生活』、『主婦の友』などの夫婦雑誌と呼ばれる大衆雑誌を素材として、快楽の平等主義を検討した研究に（田中 2014）がある。

除くことで解決されるとみなされていた。さらにこの議論では、結婚はゴールとみなされ、それまでの過程が重視される。結婚前にお互いがよく話しあい、お互いの意見を確認して結婚することで、「新らしい愛情」は確立できると述べられた。

しかし、座談会や、鶴見や平井のその他の女性論を参照しても、どのような愛情が新しいのか、具体的な内容はあられもない。愛情の問題は性愛とつながるはずであるが、この点に触れるものはまれで、触れたとしてもたいていは恋愛の問題にすり替えられてしまう。新しい愛情の詳細については、例えば以下のように説明される。

新らしい愛情は、相手への誠実な奉仕から生れます。相手の幸福のために努力するという関係の中から、感謝も理解もうまれてきます。(…)相互の立場は異り、仕事の性質内容が異ろうとも、相互の立場を理解し、お互いに協力援助してゆく生活の中から、愛情が育って行くのです。(…)これは男女夫婦の愛情ばかりではありません。親子、兄弟においても同様です。(平井 1956: 60-61)

「新らしい愛情」は、相手への誠実さや感謝、協力、理解などといった一般的道徳と結びついて語られている。親子や兄弟に対する愛情と同様だと語られていることから、ここで述べられる「新らしい愛情」が性生活に直接かかわるものではないことがわかる。これは性を直接的にタイトルに掲げ論じられる場合にも同様である。

あたらしい性のモラルは、男女の新らしい協力関係のなかから生れていきます。お互いの立場を理解し、お互いの苦しみを知り、お互いの人間性を尊重する心がけのなかから生れていきます。(…)あたらしいモラルは、職場、サークル、仲間、家族などの集団生活のなかから、相互の点検、批判、援助を通じて生れていくということです。瞬間の快楽ではなく、永遠の愛情を求めるならば、男女のあたらしい関係も、友人や家族や隣近所の人たちにささえられ、承認されるようなものとなるでしょう。またそのようなことへの努力をぬきにしては発展も成長も望めないでしょう。(平井 1956: 41-42)

あたらしい性のモラルとされるものは、集団生活の中で点検されながら生じ、さらにそれは友人や家族や隣近所の人々に承認されなければならないという。ここで述べられている性のモラルとは、周囲に開陳できるものであり、つまり性生活についてではなく、やはり恋愛や結婚の進め方を指しているとみなせる。このように、当時の生活記録運動やサークル活動、文学運動において、愛情や性の議論は実質的には恋愛や結婚に至るまでの過程を論じており、性愛という面から夫婦の「新らしい愛情」が論じられたことはほとんどなかったと評価できる。夫婦の性愛論を提供したのは高橋鐵らによる性科学の言説であるが、

これらは前述のように性別役割分担などの前提を含み、またその語り口も到底真剣なものとはいえなかった。このような中に現れたのが『奇譚クラブ』の<告白>である。

### 3-2 <告白>に描かれた夫婦生活

『奇譚クラブ』には、夫婦間の変態性欲を題材とする<告白>やエッセイは、主流ジャンルというほどではないがかなりの数がある。これら何を描いているのかを検討したい。

<告白>の多くは、当時の主流な説明であった「性解放」や性の民主化というロジックを用いていない。むしろ『奇譚クラブ』には、これら主流派言説に対する批判が定期的に掲載され、一般社会の変態性欲に対する態度、とりわけ高橋鐵ら性科学系統雑誌のロジックに関して対立的な姿勢を見せていた。

『奇譚クラブ』の<告白>はポルノでもあると既に述べたが、とはいえ<告白>のなかには、エロティックな描写が少ないかほとんどなく、単に日常生活や著者の感情をつづただけの、ポルノとは見なしがたい内容のものも多くある<sup>18</sup>。明確にポルノ的な表現を含むものも、『SEISHIN REPORT』掲載の告白に比べれば明らかに性的な描写の割合は少ない。これらの<告白>の多くは、性の実践そのものよりも、むしろ夫婦の日常生活や関係性についてしばしば詳細に描写している。

①奥の六畳の間の天井は空襲の激しかった頃の名残で真中がとりはずせるようになっていました。私達はその二尺四方位の穴を通して、梁から綱を滑車で上下して私の体を吊り上げることの出来るようにしました（…）私達は、私達の寝室の雰囲気をやが上にも怪妖なものにするために、様々な工夫をしました。赤や青の電燈、どぎつい色の壁掛け、全身をうつして見る事の出来る姿見などがそれです。私達の部屋は以前の何倍かの明るさに照明出来るようになったのです。（羽村 1952: 21-22）

②折檻部屋は、地下室で、それまでは物置に使っていたところです。丁度六畳ばかりの広さがあり、茶の間の床をあげると階段がありそこへおりてゆかれます。息抜以外には一つの窓もないコンクリート壁の地下室で、階段の尽きるところには鉄の扉があります。私たちはここを片付けて舞台装置をしました。壁の四方及び天井には鏡をつけ、鏡をおけない場所には、黒い紙をはさんだガラスをその代用としました。（…）床には赤い毛布をしきつめ、寝台用のマットをおきましたこの部屋は、鉄の柱や天井に近い部に鉄の梁がありますので縛つたり吊したりするには、もつてこいなのです。（古川 1952: 120-121）

<sup>18</sup> この点は、例えば女性のくしゃみに性的興奮を覚えるといった、必ずしも膣ペニス性交などの規範的な性的描写を必要としない欲望が多く存在したことも影響している。

両作で描写されているのは、いずれも寝食分離がなされた夫婦の性愛の空間である。これらはポルノとして、場の情景を想像させるための仕掛けとも捉え得るが、それだけにしては分量を割きすぎている。当時、夫婦だけの寝室、すなわち性愛空間としての夫婦用の個室は特別な意味を持っていたことを想起する必要がある。

戦後の住宅理論を分析した西川祐子によれば、当時の住宅理論のキーワードは封建制批判であった。家長の統治する空間であり、前時代的な「イエ」の営みを容れる器でしかなかったこれまでの日本の「封建的住宅」に対抗するものとして、核家族のみの居住を前提とし、「夫婦の私生活」空間の確立を重視する住宅がこぞって提案されたという。さらに、この近代的核家族における良き夫婦像は、アメリカをモデルに、まず空間的にイメージされていた（西川 2004）。

加えて赤川学によれば、戦前期日本においては、婚姻外性行動を規制し、夫婦間に性愛を限定しようとする言説が形成され、夫婦間性行動のエロス化が進行する（赤川 1999）。戦後に至り、1946年に再販されたヴァン・デ・ヴェルデ『完全なる結婚』は、夫婦における性生活の重要性、特に女性のオーガズムの重要性を説いていた。「キンゼイ報告」においても、女性の自慰経験者が6割を超えていることなどが示され、女性の性欲の可視化を後押しした。同時期に展開した産児調節運動もまた、生殖から夫婦の性行動を切断し、性愛化を促進させたという（荻野 2008）。ベストセラー雑誌『夫婦生活』の裏表紙には、毎号夫婦ふたりだけの家のプランや寝室の提案が間取り付きで紹介されていたという。ほかの家族に邪魔されず性生活を営める夫婦二人だけの家と寝室は、単にエロティックな好奇心をそそるだけでなく、ポジティブな新時代の夫婦イメージ、封建制を克服した近代的な夫婦像を喚起するものであった。

夫婦の寝室が置かれたこのような当時の文脈を踏まえ①・②の記述を読み直すなら、詳細な寝室の描写に、近代的な夫婦像を提示しようとする意図を読み込むことが可能である。寝室をエロティックな空間として作り上げるのが「私達」という、夫婦二人になっていることも重要である。妻が夫婦生活において主体的にふるまい、そして夫と対等に何かを共同で成し遂げること、これは当時理想とされた近代的夫婦のありかたである。つまり、①・②においては、夫婦間の変態性欲の実践が、戦後民主主義にのっとった近代的夫婦像と重ね合わされる形で描写されているといえる。当時、変態性欲者とは狂人か犯罪者、あるいは未だ罪を犯してはいないが将来起こすであろう潜在犯罪者であり、強くスティグマ化されていた。つまり、近代性とは対極にある野蛮で危険な人々だと認識されていた。近代性と結びついた変態性欲者たちの姿は、確かに他のメディアにそれまで存在しなかったものであり、読者に衝撃を与え当事者を感動させたことは頷ける。

羽村京子は、「狂い咲くカンナ」は結婚後1年間の出来事をテーマにしており、「その一年間の出来事<sup>ママ</sup>を詳しく書くことこそ、この告白の主な目的だつたのです」（羽村



1952: 19) と述べている。実際に本作では、羽村が自由恋愛の末現在の夫と結婚したこと、その後の幸せな日常と性生活が語られる。彼らは、結婚1周年の記念日の連休に、思う存分、自由に「しびれるような歓喜に浸りきった」と述べ、この数日は、羽村夫婦の愛情関係において画期となる期間として語られる。彼らの結婚記念日は、5月3日の憲法記念日であると明記され、とりわけ作中の日付である、1952年5月3日は、「講和条約発効後のすぐ後でもあったので、誰も彼もうきうきとその数日をすごし」た。羽村夫妻の、変態性欲を介した愛情の深まりという喜びが、憲法記念日と、日本の主権回復というあたらしい出発の日における歓喜と重ねて描写されていることは示唆的である。羽村の<告白>は、夫婦間の変態性欲の実践が、封建的で野蛮な暴力ではなく、あくまで近代的で進歩的な夫婦のあり方に沿うものだけであることを示そうとしているのである。

変態性欲の実践と近代的な夫婦のあり方をあわせて描写する作品は数多い。吾妻新「感情教育」（1953年11月号～1954年9月号）もまた、性生活ではない夫婦の日常生活の描写が半分近くを占め、妻と夫との対等性が強調される。次に吾妻が発表した小説「夜光島」（1954年10月号～1955年4月号）は完全なフィクションであり、真のサディストと真のマゾヒスト夫婦の生活を描いたものである。にもかかわらず、本作において性描写はさらに後退する。夫婦が詩を朗読しあったり、散歩をしたり、食事をしたりという、ありふれた仲睦まじい夫婦の日常が細かく書き込まれ、これらの日常の近代性と変態性欲の結合が描写される。

1954年7月号に掲載された久留米栄「夫から妻から」は、夫婦の往復書簡という体裁をとっており、「縛るといふことより、それを通じてみた夫婦生活の考察」という副題が付されている。本作品は手紙の形態をとりつつ、彼等の性生活がいかに進展し、それが愛情の深まりといかに連関しているかということを描写するものである。菅野房江「眼帯マニアの妻の記」（1955年1月号）は、日記形式で夫との眼帯プレイを描くものだが、性の実践以外に多くの日常生活の描写を含む。その他、若林啓子「被虐の愛情」（1953年8月号）、田谷敬生「夫婦愛の表現法としての裸女緊縛について」（1953年8月号）など、変態性欲を愛情と結びつける意図を持った作品が定期的に登場するようになる。

これらの作品は、いずれも変態性欲と夫婦の愛情の深まりがいかに関連しているかということ、そして変態性欲を実践する夫婦にも、きわめて常識的・一般的な日常生活が存在するという点について熱心に描写していると評価することができる。なぜ彼らはそうしたのか。それは、変態性欲と夫婦の愛情の結合こそが、「新らしい愛情」として『奇譚クラブ』において読みかえられたからである。

### 3-3 愛の読みかえ

美の探究者を以て自任する私が今迄本誌の存在を知らなかつたというのは全く不覚の至りです。(…)殊に羽村京子さんの「狂い咲くカンナ」の如きは讃嘆するばかりです。(A.S「無題(読者通信)」1953年3月号、62頁)

夫婦の性生活を描く<告白>が「美」を表現しているという評価は同時期の読者通信欄に頻繁に見ることができ、ここで「狂い咲くカンナ」に向けられている「美」という賛辞は、外見的な何らかの美しさを称賛しているのではなく、夫婦の愛情に向けられていると判断できる。この愛情は、変態性欲を介して成立するものであるが、男女の対等性や女性の意見の尊重といった点だけをみれば、鶴見和子や平井潔が主張した「新しい愛情」と矛盾するどころか、ぴったりと一致する。また、変態性欲と結びつく形で描かれた夫婦の愛情のあり方は、『奇譚クラブ』では病理や異常ではなく「進歩的な性欲観」だと表現されることもある。変態性欲は、既存の性愛から逸脱するという点で、「新らしさ」や「進歩」と接続する余地もあった。ここに、鶴見や平井らが描くことのできなかつた具体的な近代的夫婦の性生活と「新しい愛情」が、変態性欲を介することで具体的に描かれていると言い得るのではないか。

<告白>が描く文脈においては、変態性欲の過激さや逸脱性は、「新しい愛情」の成立を妨げるところか補強する。なぜなら、「異常」で「暴力的」な実践を含みながらも夫婦関係が円満に維持されるということは、日常生活において対等で自律的な男女の関係、相手への誠実さや感謝、協力、理解によって成り立つとされた近代的関係が確立しているからこそであるとみなされたからである。すなわち、夫婦の変態性欲を描く<告白>は、変態性欲の実践そのものではなく、むしろ平凡だが近代的な日常生活を描くことにその主たる目的があった。

『奇譚クラブ』において<告白>と近代化という言葉が直接的に結びついたのは、1952年12月号に掲載された古川裕子「囚衣—ある人妻の生活記録—」と、それに呼応した吾妻新=村上信彦の一連のサディズムの近代化論を契機とする(河原 2015)。「ある人妻の生活記録」という副題からは、編集部が「囚衣」を生活記録と重ね合わせようとしていたことがうかがえる。その意図は、実名で、ありのままをつづることが原則の生活記録と重ね合わせることによって、リアリティを補強しようとしたものとまずはみなせよう。古川は、その後『奇譚クラブ』に作品を連載するにあたり、編集部から「日常のこまごました生活や心理について書いてほしい」と依頼されたことを述べている(古川 1954: 65)。編集部が古川の記録に求めていたのは、ポルノ的な描写のリアリティというよりも、日常生活のリアリティであったと判断できる。

残虐・残忍・変態のあらゆる情景だけを次々に読ませられるのでは、刺激は充分ですが、読み終わってから、心身に何か栄養になったと云う喜びや安らぎを多く感じる事が出来ないのです。別に教訓を望むのではなく、舌に強い刺激性飲料としてでなく明日の生活の為の糧となるものが欲しいのです。アブ専門の雑誌にしても、その基盤となっているのは、性探求と云う事だと思います。(…) ささかや<sup>ママ</sup>であるが人に知られない愛の美しい表現形式。(…)があってもいいと思います。(狩井麗作「眼帯とマスク」1954年7月号)

狩井は、残虐・残忍・変態の情景を描写するだけでは、喜びや安らぎを多く感じる事が出来ないと述べている。これを感じる事ができ、明日の生活の為の糧となるものとして、「愛の美しい表現形式」をのぞんでいる。「愛の美しい表現形式」とは、愛情と結合した変態性欲の実践のことを指している。

夫婦の性愛を直接的に扱おうとした高橋鐵らの科学的まなざしにおいて、性の告白は、夫婦の寝室の中、および性欲そのものをいかにありのままに描写することに重点があった。狩井の言い方を借りれば、これらは「残虐・残忍・変態のあらゆる情景だけを次々に読ませられる」だけであり、明日の生活のための糧とはならない。

変態性欲のなかでも、特にサディズムは、正当化できない単なる暴力と、その外見においては全く区別がつかない。性愛と日常生活が結びつき、内面の充足と夫婦の愛情が描写されなければ、変態性欲を肯定することは難しかった。一方、これらが暴力ではなく「新しい愛情」だとするならば、それをポルノとして消費することもまた正しい行動として正当化することができるのである。

### 3-4 近代的主体になる

編集部は1955年1月、「告白文・体験談の書き方」と題して、自ら告白の書き方を指導する記事を掲載するに至る(184頁)。「ありのままを話すように書けばそれでOK」、「真実をありのまま、てらわずに書くことが生命」、「よそゆきの言葉で話そうとするから書けなくなる」といった指南は、綴方・生活記録の指南文言とよく似ている。

「告白文・体験談の書き方」は、「形式にとらわれる必要はない」項で、「如何にきれいな字で原稿用紙にきちんと書かれてあったって、ウソ八百のこしらえものゝ告白であったら、一文の値うちもありません」として、一見フィクション性を否定している。しかし、編集部が稚拙な<告白>に手を入れたり、常連投稿者に改作してもらったりしていたことには数々の証言がある。生活綴方・記録もまた、火付け役となった『山びこ学校』(1951年)が、教師による児童への教育実践であったように、また大人の生活綴方・記録運動が、記録を共同討議・添削し、推敲を促すというシステムであったように、外部か

らの介入を前提とするものであったことを想起する必要がある。『奇譚クラブ』の書き手たちもまた、<告白>の修正・改作を、信頼できる理解者からの添削として、また野間の指摘した意味でのフィクションとしてとらえて歓迎していた。すなわち、より自己の欲望を見つめなおし、自己の真実を探求することのできる方法として、添削や改作は積極的に肯定されていたのである。

このように、『奇譚クラブ』において、生活記録運動の手法は<告白>に転用されていると考えられるが、当然、『奇譚クラブ』で起きていたことは生活記録運動と同じではない。そこで、再び野間宏の理論を参照し、両者の相違点について検討したい。

野間は生活記録運動において、弁証法的思考によって現実生活の矛盾に着目することで、その本質を理解するという方法を重視したという（和田 2003）。彼は1955年前後、『生活と文学』や『若い広場』などの雑誌でしばしば生活記録への論評を行った。その論評は例えば以下のようなものである。

もっと明らかにする必要があるというのは、この作者の感情のなかにすでに家族制度によってゆがめられた家族主義的な感情が生れていはいないかと考えるからである。もちろんそれが生れていなければよいのだが、農村の家にそだった人で、その人間がいかに家に対して批判を持っていたとしても、全然家族主義的な感情がそこに生れていないなどということは考えられないからである。（…）家族制度に対するこれほど深い考えをもっている作者であるから、当然父に対しても、きびしい批判を持っているにちがいないのである。ところがその点がほとんど出されていない。そのために作者のこの家における位置もまた十分あきらかになってこないのである。（野間 1956: 70-75）

野間は、『生活と文学』1956年5月号に掲載された生活記録、鳥羽静子「母のこと・私のこと」の論評を通じて、綴方・記録が何をとらえ、描くべきなのかについて論じてゆく。野間によれば、「母のこと・私のこと」は、母のふるまいを描写することを通じて家制度を批判しているが、そこには当然根本的に批判されるべき父親への言及がない。野間はこの点に、作者の感情のなかに「家族制度によってゆがめられた家族主義的な感情」を読み取る。そして作者にこの感情をみつめ、咀嚼し、記録へとおとしこむことを要求する。ここで止揚されるべき矛盾として対置されているのは、封建制の克服を理念として抱く主体と、慣習によって構築されてしまった古い主体である。

このような弁証法的方法は、先に引用した黒井珍平「僕の記録」における「矛盾を統一して調和に達する為への、自己完成への考察」という文言を想起させるものである。黒井の述べる<告白>の目的は、野間の生活記録への姿勢と類似的である。しかし、<告白>において対置される矛盾点とは、人格と欲望である。前述の通り、当時の社会において、変

態性欲を抱く者はその人格までもが否定され、潜在犯罪者、精神病者とみなされることが一般的であった。異常な性癖を持つが心優しい人間が存在するとは想定されていない。だからこそ、近代的夫婦を描く〈告白〉はインパクトを持ちえた。

生活記録における矛盾点が主体の内部に見いだされるのに対し、変態性欲者たちが直面した矛盾点はそうとは限らない。異常者というレッテルは社会が貼ったものであり、自身が本当に異常な精神病者、あるいは封建的価値観を内面化した野蛮な人間なのかという点が、問われるべき矛盾点であったと考えられる。これは社会と変態性欲者の間に存在する矛盾である。

羽村が〈告白〉によって自己を客観化した際行われる「反省と安心」はこの点にかかわっている。彼らは〈告白〉を書くことを通じて、自身が真に恐ろしい異常者・野蛮者なのか、そうでないのかを探っていく。このため〈告白〉において告白者の内面に探し求められるのは、社会に害なす欲望、危険で野蛮な本能である。

羽村は自己の欲望そのものがはらむ「暴力性」・「異常性」を見つめ、それを率直に反省する。しかしこの暴力性・異常性は、それを土台に構築された「新しい愛情」の発見により正当化される。さらに羽村は、自身の内面を精査し、野蛮な本能や封建的思考の不在を確認し、むしろ変態性欲が夫婦の愛情と固く結びついており、さらには愛情を深めるものであること発見する。羽村が〈告白〉によって得る「安心」は何よりもこの不在と発見に基づいている。羽村が〈告白〉に求めた「反省と安心」は、このような一連のいとなみだと考えられる。

危険で野蛮な本能と封建的思考の不在は、徹底して確認される。なぜなら、少しでも封建的な価値観が自身にのこっていたりすれば、彼らの行為は前近代的なふるまいとなり、肯定することができないからである。したがって『奇譚クラブ』の〈告白〉で描くことが要求されたのは、すでに完全に自己改造を遂げた自律的な近代的主体である。

この点に生活綴方・記録との大きな相違を読み取ることができる。先にみたように、野間のような生活記録運動の推進者が要求するのは、綴方・記録上のささいな矛盾点を突破口に、これまで作者が気づいていなかった封建遺制や感情をあぶりだし、それを描写することである(和田 2003)。すなわち彼は、綴方・記録に、封建制を描写することを要求したといえる。しかし、『母の歴史』を中心に鶴見らの活動を分析した中谷いずみは、「もっといい方法がないか探そう」「みんなで話し合っていこう」といった文言で締めくくられる綴方・記録は、テキストの外に問題の解決を期待するものであり、常に「解決」を果しえない「私」という語り手を必要とすると指摘している(中谷 2013)。そのため、「『語る』という行為では『自律的』かつ『主体的』であるかのように見える『綴方』は、その語りのスタイルによって『受動的』で『無力』な『私』という表象」を逆説的に生み出していくという。

この指摘は野間のスタイルにもあてはまる。自らに内在する封建制を見つめよ、という野間の要求は必然的に、作者をいまだ封建制にとらわれた人間として位置づけることとなる。これに対して、『奇譚クラブ』に集った変態性欲者たちは、生活記録運動の手法と理論を転用しつつ、変態性欲の周縁性を新しさに読みかえ、対等な夫婦の愛情生活に接続することによって近代的主体になる方法を発見した。その是非はともかくとして、これこそが、<告白>に見いだされた真実であり、多くの人々を感動させ、次々と<告白>する人々を産み出した理由である。

## おわりに

『奇譚クラブ』における真実の追求は、もちろん彼らが真に近代的主体になったことを意味せず、また、そもそも近代的主体を理想とする価値観自体が現代において揺らいでいる。生活記録運動もまた、1950年代後半には早くも失速してゆく。しかし、生活記録運動を通じては到達することが困難であった近代的主体に、当時最もスティグマ化されていた人々である変態性欲者たちがいち早く、奇抜な方法で到達していたのだとすれば、それは極めて興味深い事態ではなからうか。変態性欲者の主体形成は、これまで男性同性愛研究を中心に、とりわけ性科学という強力な枠組みとの関係で論じられてきたが、『奇譚クラブ』にみられる真実への接近姿勢は、性科学を通じた主体形成とは別のアプローチだとは言い得るだろう。

さて、『奇譚クラブ』をはじめとする戦後の性風俗雑誌において、変態性欲者として誌上に現れる人々はほぼすべてが匿名である。読者通信欄の短い文、性科学系統雑誌の相談欄に引用される彼らの語りからは、彼らを、思想を持った個人として浮き彫りにすることは難しい。しかし、<告白>のようなある程度分量のある作品、そして、彼らがまがりなりにも真実を追求しようとして綴った内容は、十分に彼らを個人として浮かびあがらせる。匿名作家によるポルノ的作品はこれまでほとんど史料的价值を見出されてこなかったが、本稿で明らかにしたように、実は多くのことを語ってくれる。『奇譚クラブ』と性科学系統雑誌との対立関係のように、当該期の性風俗雑誌のそれぞれの関係性、影響関係を踏まえた精緻な見取り図を描き、史料批判を適切に行ってゆけば、これらの史料を活用する道はさらに開けていくはずである<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> たとえば『風俗奇譚』など後発の雑誌には<告白>に類似する作品が多く掲載されていることが確認できる。加えて、従来性科学雑誌と評されてきた『風俗科学』、そして男性同性愛者からの投稿で成り立っていた『アドニス』にも、本稿で示した<告白>という様式が見出される可能性は高い。前川直哉は、『アドニス』3・4・7号に掲載された手記、「Y.K「お兄さんの日記」が読者から人気を博し、これを契機に、読者から投稿された手記が同誌の主要コンテンツとなっていくことを指摘している（前川 2017: 86）。筆者は『アドニス』を所持していないため確認することができないが、『アドニス』にみられるこのような動きは、『奇譚クラブ』における<告白>の展開との関係で読み解くことが可能かもしれない。

本稿では、<告白>のうち、夫婦をテーマとするものみに着眼したが、言うまでもなく、『奇譚クラブ』の<告白>は夫婦間の変態性欲に限られるわけではない。多様なテーマの<告白>が、それぞれいかなる意味を持っていたのかを明らかにすることも今後の課題である。

《参考文献》

- ・ 赤川学（1999）『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房
- ・ 吾妻新「感情教育」全10回、『奇譚クラブ』1953年11月号～1954年8月号
- ・ 荻野美穂（2008）『「家族計画」への道』岩波書店
- ・ N（1953<sub>カ</sub>）「一八歳より接した女性より得た記録」『SEISHIN REPORT』2、1953年10月<sub>カ</sub>
- ・ 狩井麗作（1954）「眼帯とマスク」『奇譚クラブ』1954年7月号
- ・ 河原梓水（2015）「病から遊戯へ 吾妻新の新しいサディズム論」、井上章一・三橋順子編『性欲の研究 東京のエロ地理編』平凡社
- ・ ——（2019）「マゾヒズムと戦後のナショナリズム—沼正三「家畜人ヤプー」をめぐる」、坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社
- ・ キンゼイ・C・アルフレッド著、永井潜、安藤画一訳（1950）『人間に於ける男性の性行為』上下、コスモポリタン社
- ・ キンゼイ・C・アルフレッド著、朝山新一・石田周三・柘植秀臣・南博訳（1953・1954）『人間女性における性行動』上下、コスモポリタン社
- ・ 川村湊（2000）『作文のなかの大日本帝国』岩波書店
- ・ 北河賢三（2014）『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店
- ・ 黒井珍平（1953）「僕の記録」『奇譚クラブ』1953年5月号
- ・ 酒井晃（2009）「戦後初期日本における男性性の「再構築」——男性の主体化と「男女平等」」『文学研究論集』31
- ・ ——（2012）「戦後日本における高橋鐵のセクシュアリティとナショナリズム」『文学研究論集』36
- ・ 櫻庭太一（2013）「小説集『世界神秘郷』と高橋鐵の作家活動について」『専修国文』92
- ・ ——（2014）「反・反骨の大衆作家」としての高橋鐵：『南方夢幻郷』とその周辺資料から『専修人文論集』95
- ・ 七面堂究斎「セイシン・レポート総目次」  
<http://www.kanwa.jp/xxbungaku/SexualReport/Seishinkai/Report/Report.htm>、閑話休題、XX文学の館、<http://www.kanwa.jp/xxbungaku/index.htm>（2022年1月31日参照）
- ・ 鈴木敏文（1993）『性の伝道者 高橋鐵』河出書房新社
- ・ 高橋鐵編集/日本生活心理学会（1987）『全35巻完全復刻 生心レポート（上巻・下巻・別巻）』

銀座書店

- ・ 田中亜以子 (2014) 「「感じさせられる女」と「感じさせる男」」 (小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『変容する親密圏/公共圏 8 セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会)
- ・ 鶴見和子 (1998) 『鶴見和子曼荼羅Ⅱ 人の巻 日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店
- ・ 鳥羽耕史 (2010) 『1950年代 「記録」の時代』河出書房新社
- ・ 中谷いづみ (2013) 『その「民衆」とは誰なのか—ジェンダー・階級・アイデンティティ—』青弓社
- ・ 西川祐子 (2004) 『住まいと家族をめぐる物語』集英社
- ・ 沼田邦人 (1952) 「無題 (読者通信)」『奇譚クラブ』1952年12月号、p.127
- ・ 野間宏 (1956) 『真実の探求—現代文学の方法—』理論社
- ・ 羽村京子 (1952) 「狂い咲くカンナ」『奇譚クラブ』1952年9月号
- ・ 平井潔 (1956) 『現代教養文庫 人生と愛について』社会思想研究会出版部
- ・ フーコー、ミシェル著、渡辺守章訳 (1986) 『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社=Foucault, Michel. (1976). *Histoire de la sexualité: la volonté de savoir*, Paris: Gallimard.
- ・ 福田英一 (1953) 「マゾヒストの果」『奇譚クラブ』1953年1月号
- ・ 古川裕子 (1952) 「囚衣—ある人妻の生活記録」『奇譚クラブ』1952年12月号
- ・ —— (1954) 「わが心の記—あるマゾヒストの女の日記—」『奇譚クラブ』1954年6月号
- ・ 前川直哉 (2017) 『男性同性愛の社会史』作品社
- ・ 南塁 (1952) 「(無題) 読者通信」『奇譚クラブ』1952年12月号、p.43
- ・ 村上隆則・石田仁 (2006) 「戦後日本の雑誌メディアにおける「男を愛する男」と「女性化した男」の表象史」矢島正見編『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部
- ・ 山本潔 (1993) 「高橋性学裁判とはなんだったのか 経過と意義」『新文芸読本 高橋鐵』河出書房新社
- ・ 和田悠 (2003) 「1950年代における鶴見和子の生活記録運動」(『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』56)
- ・ Mackintosh, J.D. (2010). *Homosexuality and manliness in postwar Japan*. Abingdon, UK: Routledge.
- ・ —— (2013). The Pornographics of Japanese Negrophilia. *Japan Forum*, 25(1), 1-23.
- ・ McLelland, M. (2004). From Sailor-Suits to Sadists: Lesbos Love as Reflected in Japan's Postwar "Perverse Press". *U.S.-Japan Women's Journal*, 27, 27-50.
- ・ —— (2017). 9. Takahashi Tetsu and Popular Sexology in Early Postwar Japan, 1945-1970. *A Global History of Sexual Science, 1880-1960*, edited by Veronika Fuechtner, Douglas E. Haynes and Ryan M. Jones, Berkeley: University of California Press, 211-231.



【付記】

- ・ 本稿は、科研費・21K17987の助成を受けている。
- ・ 本稿は、日本史研究会2017年7月例会での口頭報告を加筆修正したものである。

---

河原梓水（かわはら・あずみ）

福岡女子大学国際文理学部講師。戦後日本セクシュアリティ史、変態研究。『奇譚クラブ』などの雑誌メディアを主な研究対象とし、サドマゾヒズムを通じてみた戦後思想とその展開を描くことを目指している。Email: ak043025@fwu.ac.jp Twitter: @kawahara\_azumi